

「何人半人」

強固に塞ぐ落日の 感は無情な過去に暮れたし

曝す己は過去になり「身体恫喝鱗模様」軋む夜空の隅々に 我を失い
姿は変わり せせら笑うは他人の空似

嬉々廻廊の見上げて鏡下の蓋を閉じ 差し出す指に舵をとり 等閑
加減に口に入れ 遠い憶測身にかかり 肩の後ろに釘を刺す

釘を刺す

釘を刺す

釘を刺す

捕獲の木石水屑に変わり 勝手変り身無我無人

落首に躍る何人よ 身体空洞水にも成らず 五体まともに飛廻る

統覚された太古の情は 境界広がり無数の者に あれよあれよと受精
をせがみ 己一人で肘重ね 顔を塞いで目を閉じる

立ち消え浮かぶ波状の枝を 右に左に分け進み 開いた視界の矛先に
返す視界を身につつむ

暮れ六つ時の惚焉と されも満ちたる境地の重み 嘘は言葉の主とな
り 風に吹かれてさらわれる

黒く澱んだ股木を掴み 身体覆って身構えて 来るとも知れず散々と
来る日も来る日も眠りも忘れ 今か今かと待ち倦む

指先身体に固められ 背負う姿は開拓人

日覆い灯火の目隠しされて付与無し空虚な夜見上げ フラーフラーと
両手を上げて 降りこむツブテを素手にとる

剣山宜しく踊る人影観て笑い 始終八苦にさ迷う羽根を 絶えず見
し身に着けて 覗いた姿に我かえる

縦横無尽に飛び散る羽根を 陰陽交互に衣で隠し 正対ならずと脈を
打ち 怒張に膨れる動脈と 杜絶の途中に詰め戻し カタチ失い爪隠す

尺骨併せ正気に戻り 固めた身体は蒼白に 人半分の想念は チドリ
チドリと孤をなぞり 吹鳴高らか反り返り 鼓膜塞いで 針を刺す

針を刺す

針を刺す

針をさす

何者判らず半人よ 問いに答えぬ半人よ そろりそろりと身を隠し
錆びた背中の真鍮を 磨く姿の繰り返し

繰り返し

繰り返し

繰り返し